

H4.6.26
H11.3.11

紀上148^P

かみきえ あまのうづめ
眼力509 天鈿女
紀上112

2,850^P 1/2 紀上148^P 小96^P

ようづめ
石

なから、こ水見よかしく立った。(神代紀下第九段
一書第一参照)

脈の下へおし垂れた。
そいて天鈿女は、その神に向つて、咲嘆い
か、やにゆに其の胸乳を露出させ、裳の帯を
え、衛の神の前へやつて来ると、何を思つたの
ま、天鈿女は、巨大な陽物の姿をして、いるハ達
ら、おまえが行つて尋ねてまいれ
あまのうづめ
あまのうづめ
そこ、瓊瓊杵尊は、特に天鈿女にお命に
なつた。

相問うことは出来なかつた。
眼力で相手をおひえ恐れさせ
皆が皆、すごすごと舞い戻つてくる
打ち、其水た様子で
瓊瓊杵尊は、お伴の者を遣わし、その神が
何のためにやつてきたのかを問ひ水た。
かーなんと、八十万もの神たちが随
いて来ているというのに、誰一人
眼力で相手をひえ恐れさせ
相問うことは出来なかつた。
皆が皆、すごすごと舞い戻つてくる
打ち、其水た様子で

(ニ) 世1680[↑] 同等以下
2850[↑] - 7/2
2848[↑]
世神 = 三叉路 上558[↑]
土是 = たかみ至 1557[↑]
三叉路 上558[↑]
男心云310[↑]
奥田秀
主め云549[↑]
相云148[↑]

あまのうすめ
天鈿女あまのうすめの美うつくしい手足てあしが、しなやかに動き、
きめ細かな白い肌はだが、艶なまめかしくも執拗しつように虚空こくう
とたわむれて、――獲田彦さるたみこの男心をいたぶり
続つづけた。
やかて、ポツとうち開ひらかれた赤あかい唇くちびるから、
「ああーっ」
と悩なやましげな吐息といきが漏もれはじめた。
ここに、あまのうすめ 衝神ちまたのかみ（岐神いさなのかみ）は、顔中かおじゅうを真赤まっかにし
て激はげしくのけぞり悶もだえながら言いった。
「天鈿女あまのうすめ、汝いましめ爲なすことは何なにの故ゆえぞ」（神代
紀下第九段一書第一参照）
* つまり、あまのうすめ 衝神ちまたのかみ（塞神さいのかみ）は天鈿女あまのうすめの名なを知し
って「た」と解かされる。
「山の神やまのかみの化身けしんである天鈿女あまのうすめよ。おまえは
何なにの故ゆえにそのようなことをするのだ。一体何いっぴくなん
何故なぜかわざらぬ私の前まへへやつてきて、あえてそ
のような挑発ちょうはつ的な仕種しぐさをし、この私わたくしを咲嚙あざむう
のか」
だが、天鈿女あまのうすめは、それに答こたえようともせ
ず、厳さびしく「あまのうすめ 天照大神あまてらすおほみかみの御子みこが、お通りにならぬようと
天照大神あまてらすおほみかみの御子みこが、お通りにならぬようと

1446.27(日)

紀下190

紀上151

後継の子大己貴

紀上123 2,851

紀上148

後田彦

記(89)

子(3)

天照大神

天照大神の子か?

1319

し、い、道に、不届にもそのように立ち塞が
つ、い、お前は、いったい何物なのだ。
敢えて問う。名を名告るがよい。
そのあまりの剣幕に、衛神は度胆を抜か小
る思ひであつたか、――！しかし辛うじて威厳
を保ちつつ、こう言つた。
「天照大神の日子は降臨されると聞い
たので、お迎えするためにこうしてお待ちし
てい、私あづまは東の国の国くにつ神かみ。名はさふた猿田彦
彦ひこ」(神代紀下第九段一書第一。神代記、
猿田彦古神の先導条参照)
「そうか。おまえが吾妻国の岐神、猿田彦
か。前々から私もおまえの噂を聞いて
おつたぞ。素戔鳴尊の子大己貴神の薦めに
従つて、わが皇孫に仕え奉る事になつたぞ
うだな」(神代紀下第九段一書第二参照)
「な、お、日天八達あまのやちまたに關連してかへん参考さうま
す」
「推古紀十六年八月三日条に、海石榴市の術
・万巻十二・二九五に、海石榴市の八十
の衛に立ち平しと
とある。
この大和国の海石榴市の術ちまたは(奈良県桜

1954

紀上148¹

又.852^P

紀上148^P

「さらた」20頁13行

紀下9¹ 28
金屋

地名所
不町村
149^P
なし
5818¹/₂
2行

井市金屋に地理的に相当する所は、阿蘇の
外輪山の切欠部あたりと見えよう。
あるいは、白川と黒川との合流あたり
あつた衝（三叉路）のことを、曰天八達え衝
と称し、このかも知れない。
天鉦女は、重ねて尋ねた。
「おまえが私を先導してくめるのか、それ
ともこの私、天鉦女はおまえに先行しよう
か」
すると、男神猿田彦は、いかにも当然とは
かりに胸をやらせてこう言った。
「私が先導申し上げる」
そこで、天鉦女はさらに、
「ではおまえは何處へ白って行こうとして
いるのか。そして皇孫は何處に御到着される
と尋ねた。」
へ皇孫を、猿田彦はいったい何處にお連れ
しようとしていいるのだらうか
と不審に思つて、天鉦女は尋ねたのだった。

④ 2888' 紀上148'

⑤ 2855-1/2

2,853P

紀上149' 注11

随分 1176P

住みか 紀上149' 注11
21-9P

と、このころが、どうしたというのだろう。猿田
彦は、いよいよ顔を真赤にした。
人天鉦女は、私がこれから行って住もうと
してゐる所を尋ねてゐる。私の名を聞き出し
たばかりか、住み家をも知ろうとしてゐる。
随分私に気があるようだ。
と、猿田彦は内心思うのだった。
この当時、
「家や名を濫りに人に尋ねたり、告げたり
するものではない」と
とされてゐたから、猿田彦が早合点したとし
ても無理のないことではあった。
へうむ。いいだろう。
猿田彦は、心の中でうなづいて、こう答え
た。
「あまつかみ
天神の御子は、筑紫の（建）日向の高千
穂（外輪山）の穂觸峯（久住の峯）にお着き
になろう。私は、伊勢の狭長田の五十鈴の川
上へ行く。」
「答え終った時、猿田彦は天鉦女をし
っかり見すえると、

大観峰の東側

添山^山は^山4^山鼻^山か?
「能本^山」17^山 56.12.6^山
58^山

添山^山 紀上160^山末
紀上140^山
紀上148^山

紀上140^山
紀上148^山

2,854^山 - 1/2

左略天皇 8^山 - 1^山
ニモミニモミ 振筆^山

紀上148^山
小96^山

「私の住み家をも名をも聞き出して発願し
出したのはおまえである。だからおまえは私
を五十鈴の川上まで送りとどけよ」と
と言った。
天鈿女は帰還して事の次第を報告した。
〔神代紀下第九段一書第一。〕日本書紀〔上〕
日本古典文学大系、岩波書店、一四九頁、注
十一〔参照〕「萬葉集」〔一〕日本古典文学大系、
岩波書店、八頁、注一参照〕
＊
「やかて一行は、阿蘇谷の奥にそそり立つ外輪
山の絶壁の山口（登り口）に到った。
こうして、皇孫は、天磐座を離ち、――
――自らの足で急坂を一步一步登って
ゆき、天八重雲を排分けて、後威の道別に道
別きて、筑紫の（建）日向の（阿）蘇の高千
穂峯（高）千もの山々の連なる峯、いわゆ
る外輪山）に天降られた。（神代紀下第九段
本文参照）
第363回 天孫降臨
「そーてこのち後田彦は、先の天鈿女との

長方形になるようにカット

2.854 - 3/2

カットの基点

- ・カラー
- ・右頁の上半分に大きくはみだして掲載下さい。



少いカット

少いカット

1364

1404 第363回

高千穂峰に天降られた瓊瓊杵尊 (中央)

(狩野探道筆)

『名画にみる國史の歩み』編者 所功

近代出版社 平成12年4月19日発行 9頁参照

88P

全140頁

新装版 1-376
ところりさき

久住群山 地名辞 590P 896P

奇1振る 地名辞 590P 896P 紀上156P

大正 九重山に於 中尾 179m 2,855P-1/2

田心姫 2301P

550分/地図 74 函山 1787m

仁徳500 11月3日 大正 11月 2838-1/2

久住 地名辞 896P 紀上148P

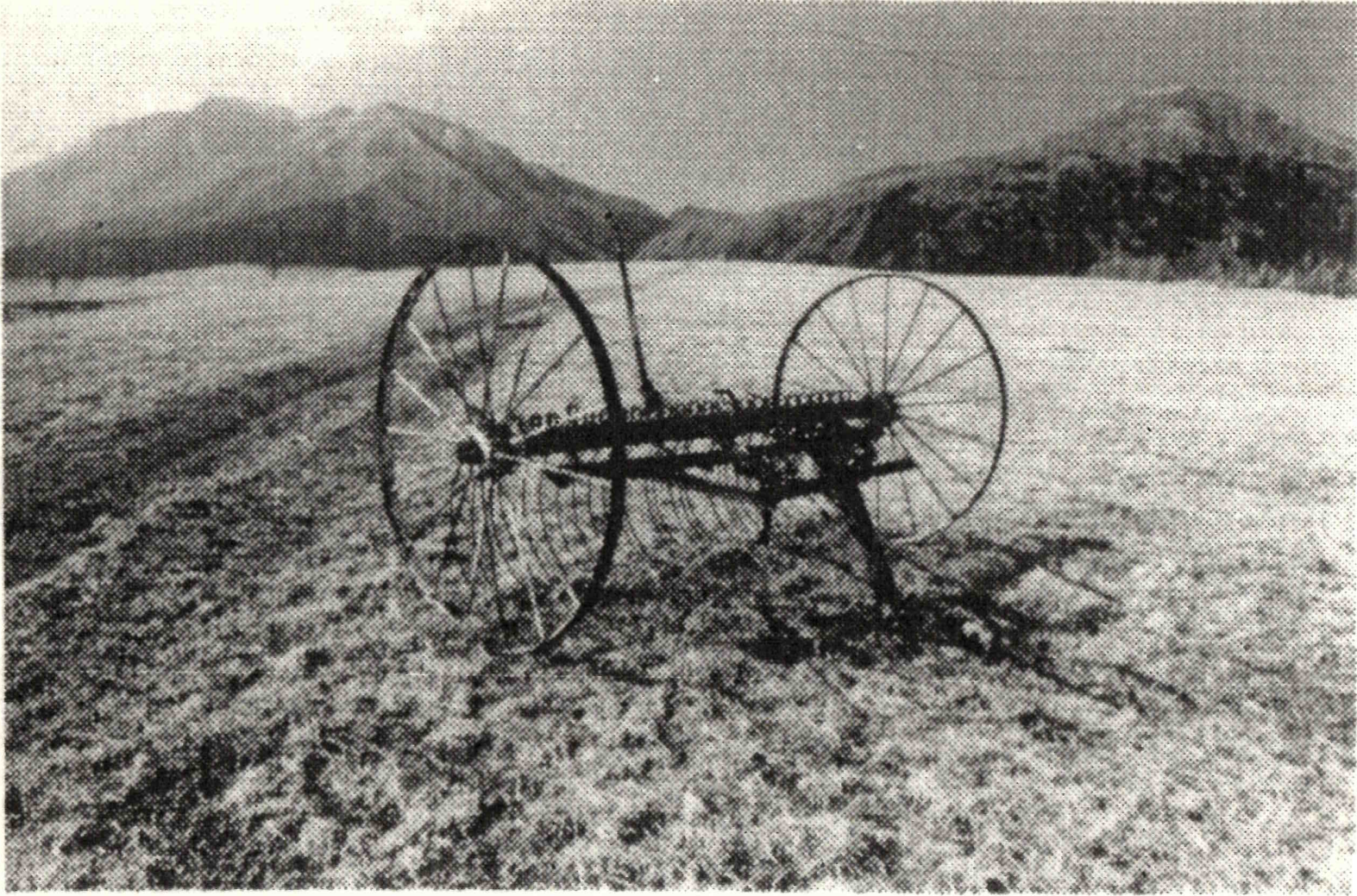
由2856 15P 紀上140 末3行 紀上156 末2行 市町村名 48P 無し

期のとおりに、皇孫を筑紫の（建）日向の外
輪山の麓に聳える櫛觸峯（久住の峯）へとお
連れして行くのだった。（神代紀下第九段一
書第一参照）
その日、奇しき靈、久住の二上の峯は、
氣高く、大倭国随一の高さを誇り、神々い
ただだいていた。
なお、久住群山は二群に分れてゐる。東北
部に大船山（一七七八m）を、はしめとする山
が聳えており、そして西南部に九重山（久
住山にも作る一七七八m）を筆頭とする山
々が聳え競って、遠望すると、久住群山は
あたかも二つの山塊からなっているかのよう
に見える。（写真図版 480）「帝国地名辞典」太田
為三郎、名著出版へクヂウサン、ダイセンサ
ン（参考）
その久住群山の南に広がる、ただただだ
つた所謂「九重野」の丘また丘を越え、
一行は捷日の二上の峯へと近づいてゆく。
先頭には、陽物神である猿田彦がいた。

ハレーションのように見える。見やすいように
おいて下さい。 2,855^p-3/2

空を明るくして下さい。

・右頁の上半分
に、大きく
掲載下さい。



・暗くならない
ようにお願い
します。

1309

1409 写真図版 480 久住高原から望む 久住山(左)と大船山(右)

角川日本地名大辞典 44『大分県』角川書店 昭和55年11月18日発行 325頁参照
1209 農機具の向こうに、九州本土最高峰の『二上の峯』(双方共、1787m)が見える。

大山津見 2484
和名抄 643P - 3/3
→ H4.6.29(月) 酉 (ニ)

KP>7
359P
703P

矣大^カ71584⁷ 耗尾断定 紀上141¹
 矣^カ2856² 市3048³
 紀上151¹ 市993²

紀小 92P ↑ ↓

紀上156^p, 140^p
 柵の裏から生れた

紀上154P
- 元亨 156P

山峡谷 568P

皇孫は、櫛日（奇一靈）久住の二上峯に
到り、大船山と九重山の間に形成され
る峡谷へと降到られた。天であつたろうか。
この二つの山の間を流れる谷川には、兩岸の
山と山をつなぐ二上の谷浮ぶかのような天
浮橋が掛け渡されていたのかも知れない。
皇孫は、櫛日の二上峯の天浮橋から、浮渚
在平処（浮島の平らな部分）へ降り立たれた後、
脊穴の空國へ荒れてやせた不毛の地を、頃
丘（丘つづきのところ）から、國見（国を求め
ること）のために行去つて、於吾田の長
屋の笠狭御崎、笠狭崎という所に到達さ
たのである。（神代紀下第九段一書第四参照）
なお、神代紀下第九段一書第四には、
「……到於吾田長屋笠狭え御崎」
とある。
なるほど通常、吾田長屋笠狭、吾田薩摩半島
西岸の野間岬のことと解されている。（日本書紀下）
「……方角的に合わないうように思われる。」
「ずい分強引なところながら、
①己百支国（魏志倭人伝）
真文学大系『岩波書店』四頁
主二（三参照）」

④ $2855\frac{1}{2}$
未285

知上^D
156
未2行

$$\begin{array}{r} \textcircled{+} 2855 \\ - 1/2 \\ \hline 587 \end{array}$$

古真文学大系 岩波書店 一四一頁
注二一(二三参照)

主がのせき 地名
佐賀関 708^r(地蔵dp)
佐賀関 島 高松町 9.2

$$\begin{array}{cc} \rightarrow 561 & 561.12/7 \\ 12/8 \oplus & \rightarrow 12/7 \end{array}$$

② 於保岐陀 おほまきだ 碩田 おほきた (景行紀十二年十月条)

③ 於保伊多 おほいだ (和名抄)

④ 於吾田 おほあした

は、皆、大分のことであろう、と考えてみた

因 ちな み に 述 べ る と

九州東岸の豊国に地理的に相当する所
 紀伊半島東岸の伊勢国に、英太
 (アタと訓める) および「長屋」という地名
 がある。(「和名抄」伊勢国条)

地蔵崎ともいう

名が あった という。 (「和名抄」大分郡条)
 薩摩国の野間半島の先端に、
 野間山があり、一方、豊
 國の佐賀関半島の先端に、更に突き出た「関山」(関崎)が
 あり、双方の地形の類似点に注目される。
 ほうとして判然としないが、以下、この物語
 において、
 瓊瓊杵尊は、天上の国から、
 大分の佐賀

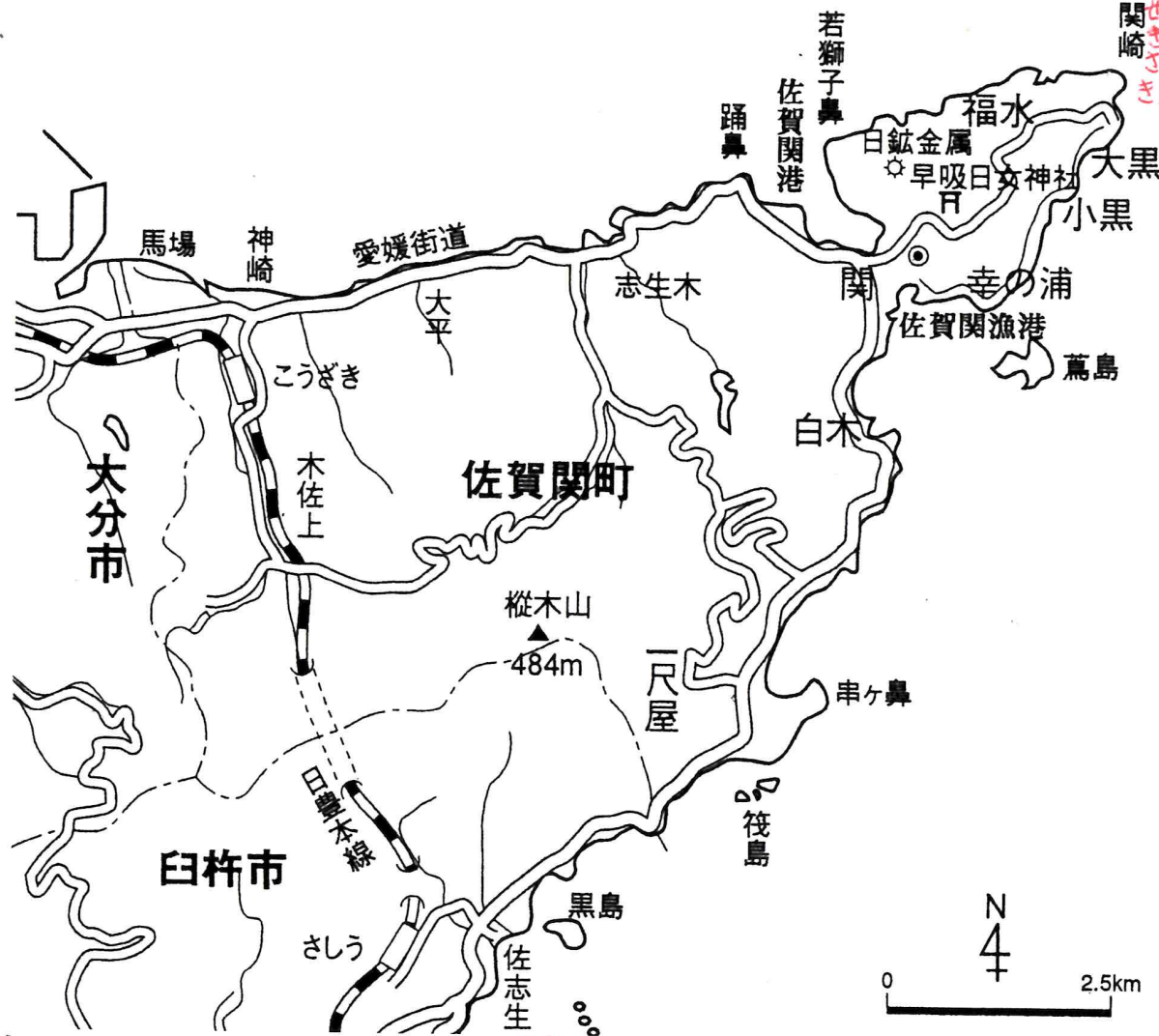
と解いて話を進めてゆきたい。

第 364 次
365 次
写真回板
481 次
482 次
参照

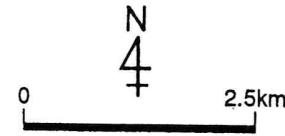
2,857^P - 2/5

重要です

・右頁の上半分に
大きく掲載下さい。



関
です



2002年3月25日発行
3049-2/3

1309

1409

第364図

佐賀関半島地図

海と島のくらし

田中宣一・小島孝夫

雄山閣

2002年3月25日発行 452頁参照

佐賀関半島の先端近くに

《括れ部》が有る

2,857^P - 3/5

空を、白くしておいて
下さい。

右頁の
下分に
大きく
掲載
下さい。



1309 1409 写真図版 481 佐賀関半島南岸の 佐賀関漁港 (2000年撮影)
『海と島のくらし』田中宣一・小島孝夫 雄山閣 2002年3月25日発行 455頁参照。

日本の山河 ④ 大分 98~99頁にも 71枚写真あり。A3の中央に縦線が入るか3枚

カー
左頁の
上半分
はみ出し
大きく
掲載
下さい。

重要です
野間山をカッターなどで下さい。

2,857² 4/5



長屋山520をカッターなどで下さい。

1324

1424 第365図 野間山甲野間半島地図

『鹿児島県』分県地図46 エアリアマップ昭文社 1996年1月発行参照。
野間半島の先端「立神」に「括れ部」が有る。 95¹

2857^P-5/5

- ・カウー
- ・左頁下半分に、大きく載せて下さい。

南

＊海の青色が濃すぎた
野間半島の緑と区別が
むづかしい。
海の青色だけ、もう少し
薄くならないでしょうか？
(特に左側だけでも)



写真図版4,5の
ように、南・北を
記載において
下さい。

新装
11-132

1409 写真図版482

野間岳(591m)の山頂から、東シナ海に突き出た野間山甲
[笠狭之御碕]を見る。

1309

『九州百名山』山と溪谷社、2002年8月1日発行、150頁参照

1269

・西北方に突出する野間半島の先端から、さらに西方へ向かって弓状に突き出た野間山甲の基部近くには、
北側(写真右側)に小さな湾があって、狭隘な地峡<括れ部>が形成されている。

前頁末2行 から 461P 唐韓
2858P-1/3

②859 1/4 ②856 12 行
同文

②859 3/8 原本第238P
記号91味
同文

ところで
②811
②831 1/2

②858
-1/3
1行と
917行
2859

ところで、古事記に天孫降臨条によると

通邇芸命は、こう仰せられたという。

「この地は韓國に向ひ、笠沙え御前に真来
通りて、朝日の直刺す國、夕日の日照る國」

本来の意味がどうだったのか分らないが

と「あえむこう解釈してみよう」

「この笠狭崎（佐賀関半島）は、韓國（か）

つ々の拘奴國（中国・近畿地方）に向かい、薩

摩國の笠沙え御前にまっすぐ通じていて、朝

日の直刺す所である。

一方の笠沙え御前（野間半島）は、詔が

編集された頃の「唐國（中国大陸）に向かい、

大分國（碩國）の笠狭崎にまっすぐ通じてい

て、夕日の日照る所である」

*

『韓神』

■ ところ

(1) 宮内省に守護神として祀られ、大己貴(おほあな)の二神は『韓神』と称さ

れ、韓神の祭は宮内省に祀ってあった韓神の祭は、古くには二月と十一月と行なわ

れ、中世以降衰え、廃絶になった。

(3) 韓神とは、朝鮮半島から渡来した神の

意であらうか、(1) 広辞苑に『韓神』に『韓神祭』

とあり、(2) 大己貴は『韓神』の二神が、

朝鮮半島から渡来したとは考えにくい。

■ この物語では『韓神』に『韓神』

① 倭国の東の拍奴国(はくなんこく)に『韓神』に『韓神』

直接支配する国に『韓神』に『韓神』

の出雲国等があった。(第2回参照)

新ヤ(1)-37頁

世と幅の狭い海峡

電瀬 佐田岬 地名辞721 紀土161 259

2.859 P-1/5

天つき 改行

佐賀国

紀土161

地名辞708

みり161

見聞書 2131 記号92P

高天の原に氷椽たかりて坐しき

薩摩国の吾田の笠狭崎にどこことなく

似た形状をいつける

の佐賀関半島に到った皇孫は

（竹島）へ降りて行かぬと考えてみた

（高島）へ参照

神代紀下第九段一書第六には、こう記されてい

「吾田の笠狭の御崎に到ります。遂に長屋

の竹島に登ります（中略）乃ち其の地を巡り覽ま

せば彼に人有り名けて事勝國勝長狭と曰ふ云々

豊後国の佐賀関半島と、伊予国の佐田岬と

の間には、豊予海峡（連吸瀬戸）がある。

（九）と日田国（近畿）とを結ぶ交通の要路に

なつていたと思われ

「豊予海峡の潮」

「絶好の中继地だった

（高島）は

この島

かび高島（竹島）は

2,859P-2/5

・カラー

・海が暗い。
もう少し明るく
して下さい。

この
シフを、目
立たないよう
にト下さい。



130G

140G

写真図版 483 佐賀関半島先端『^{せきさき}関崎』(手前)の沖に浮かぶ『^{たかしま}高島』

日本の山河④『大分』奈良本辰也監修、国書刊行会、昭和52年2月20日発行、89頁参照、101P

慣例

又、859P 3/5

竹田市史下巻 313頁にも有る 紀紀(緯) 2-15⁹

であろうや
ところか、^カ統日本紀^カ元正^カ天皇^カの^カ靈龜^カ二年五
月十六日条に、
「豊後^カ回^カ伊豫^カの二国^カの^カ界^カ下^カ従来^カ日^カ成^カを^カ置^カき^カて^カ下^カ往還^カする^カことを^カ許^カさ^カず^カ云^カふ^カし^カとある。
・関門海峡には日^カ関^カ長門^カ関^カか^カ下^カ速^カ吸^カ瀬^カ戸と豊予海峡には日^カ成^カが^カ置^カかれ、交通^カが^カ禁止^カさ^カれ^カて^カいた^カと^カいう^カ。へ^カ統日本紀^カし^カ(二)
新日本古典文学大系、一九九二年一月二〇日
第二刷発行「一五「四六〇頁参照」
・庶民は、
へ東西間を、自由^カに^カ往^カ来^カ出来^カな^カか^カつ^カた^カよう^カに^カ見^カ受^カけ^カら^カれ^カる^カ。
・「^カ従来^カ」と^カ記^カさ^カれ^カて^カい^カる^カか^カら^カあ^カる^カい^カは^カ「^カ往古^カ」(応神・仁徳朝以前^カの^カ遙^カか^カ昔^カ)に^カ溯^カる^カ慣例^カだ^カつ^カた^カ。
の^カか^カも^カ知^カれ^カな^カい^カ。(要検討)
・もし^カか^カし^カた^カら^カへ^カ従来^カは^カ、日^カ成^カを^カ置^カり^カて^カ往^カ来^カ出来^カな^カか^カつ^カた^カ、と^カいう^カ意^カ味^カな^カの^カだ^カら^カう^カか^カ。

紀上213
 紀(茶)238
 2.859P-4/5
 2859P-1/5
 4/5
 2859P-1/5

天皇孫は、この竹島(高島)に登って、
 天上の国(九州地方)と、天下の国(中国・
 近畿地方)とを、感慨深くご覧になつたので
 はなかうか

ともあれ、邇邇其命(仁徳天皇)は、瀬戸
 内海を経て近畿地方へ降り、
 高天の原に相当する難波に、宮柱を立て

氷椽(ひぐさ)の千木(ちぎ)を高く上げてお住いになつた
 ことであらうと推察される。
 古事記に天孫降臨条の末尾に、こう記す

於是詔之、此地者、向韓國、真來一通笠
 沙(さ)の御前(みまへ)而(して)朝日(あそひ)之直刺(のちす)國、夕日(ゆふひ)之日照(のひでる)國也
 故(ゆへ)に此地(このち)甚(いた)吉(よ)地(ぢ)詔(みこと)而(して)於(お)底津(そこ)石根(いしね)宮柱(みやはしら)布斗(ふと)斯(す)

理(こと)於(お)高天原(たかまのうら)氷椽(ひぐさ)多迦斯(たがす)理(こと)而坐(を)坐(ま)也(なり)
 この物語では、あえて、次のように解釈し
 てみたい。

H30(2018)7.21(土)~7.22(4回)

正

天つぎ
改行

2.859⁰-5/5

記号92⁰15分

①2858⁰同文
②2856⁰11分
③2854⁰15分
④2852⁰15分
⑤2850⁰15分
⑥2848⁰15分
⑦2846⁰15分
⑧2844⁰15分
⑨2842⁰15分
⑩2840⁰15分
⑪2838⁰15分
⑫2836⁰15分
⑬2834⁰15分
⑭2832⁰15分
⑮2830⁰15分
⑯2828⁰15分
⑰2826⁰15分
⑱2824⁰15分
⑲2822⁰15分
⑳2820⁰15分
㉑2818⁰15分
㉒2816⁰15分
㉓2814⁰15分
㉔2812⁰15分
㉕2810⁰15分
㉖2808⁰15分
㉗2806⁰15分
㉘2804⁰15分
㉙2802⁰15分
㉚2800⁰15分
㉛2798⁰15分
㉜2796⁰15分
㉝2794⁰15分
㉞2792⁰15分
㉟2790⁰15分
㊱2788⁰15分
㊲2786⁰15分
㊳2784⁰15分
㊴2782⁰15分
㊵2780⁰15分
㊶2778⁰15分
㊷2776⁰15分
㊸2774⁰15分
㊹2772⁰15分
㊺2770⁰15分
㊻2768⁰15分
㊼2766⁰15分
㊽2764⁰15分
㊾2762⁰15分
㊿2760⁰15分

①吾田の長屋の笠狭御崎に於て、瀬瀬芸命は
こう仰せられた。
「この地は韓国の白い、笠沙え御前に真来
通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国
それ（既述）
②その後、瀬瀬芸命は、瀬戸内海の最奥の
日日日本国（近畿地方）へと降ってゆか
れた。
③ここに瀬瀬芸命は、
「ここは甚だ吉い地だ」
と仰せられ、底つ石根に宮柱をしつかり立
て、日高天の原に相当する所、難波に氷椽
（千木）を高く上げてお住いになった。
と云々となのであらう」と想像される。

米

意味
2860
2/3
15分

於
おほ
12.5

大分

佐賀関半島

記号91⁰

② 8488

② 2870P-1/3 文字と数字との間の
小な点
紀上141P 紀上161P
紀上154P 紀上154P 2859P-1/3 12P

木花開耶姫（一夜妻）
このはなのさやひめ
（いちやづま）
瓊瓊杵尊（仁徳天皇）は、其の地（難波の
地）を巡幸された。
其の地には一人の者が有って、自ら曰国主曰
事勝国勝長狭と號った。（神代下第九段書第他參照）
不審に思つた天孫は、お尋ねになつた。
「何処に国が在るのか」
「此に国が有るのです。是は長狭に住む国
なのです。然れども今は、天孫に奏上ります
取捨、勅のままに、ごゆつくりお遊びくださ
いませ」
と申し上げた。（神代紀下第九段本文、一書
第二・四・六參照）即座に
曰国主曰「いえは、――――」曰
名か思ひ起さぬ。
（イ）名か思ひ先に述べたとおり下

④ 2143 難波の事代主 紀上130 新36斤P
タイトル ④ 2153-1/2 新36斤P
④ 2484-1/2 新36斤P

2.860^P-2/5

六世の孫

④ 2483^P-3/2 紀上125 1215斤
④ 2484-3/2 新36斤P

④ 2488^P アルタイ語
な は土地

③ 小国の王 となったので、
の だろ う や
などと想像される。

「大己貴も大國主も、その意味するところ
は同じである」
という。(「日本書紀」(上)日本古典文学大系
岩波書店、五六三―五頁、補注一―九七参照
第三十九章「大己貴」の項において既述)
(四)また、神代紀上第八段一書第二には、
「素戔嗚尊、奇稻田姫を妃といたまひ
て、生ませたまへる兒の六世の孫、是を大己
貴命と曰す」と記されてゐる。
・ いうまでもなく、詳らかでないが、
あるか、もし「さう」――もし「さう」なら、
① 國主・事勝國勝長狭とは、素戔嗚尊の兒の
六世の孫の大己貴のことなのではなからうか。(第34・35表参照)
・ いかも、事勝國勝長狭と、事代主とは、何
らかの深い係りがあるように思われる。
② あるいは、母國(旧出雲國)の國譲りの
後においても、國主は難波あたりに小國を保つて
いたのかも知れない(第四十五章「出雲國」
の項において既述)――
③ 小国の王 となったので、大國主でなく、國主と名乗った
などと想像される。

2,860^P-3/5

いまだつ 2861^P-7/9

2864^P-2/3
おいて

なお下

素戔鳴尊の兒の六世の孫の曰大己貴命おほなむすひのみことが

難波あたりの地ちへかつて素戔鳴尊が都を置おきい

ていた神聖極まりない小地域こちゆうぎを辛うじて領有りやうゆう

この小国を皇孫瓊瓊杵尊にぎはひのみこと（仁徳天皇）へお譲やう

りしたので、國書で正史曰日本書紀にその

時の情況が記載された

と考えてみたい

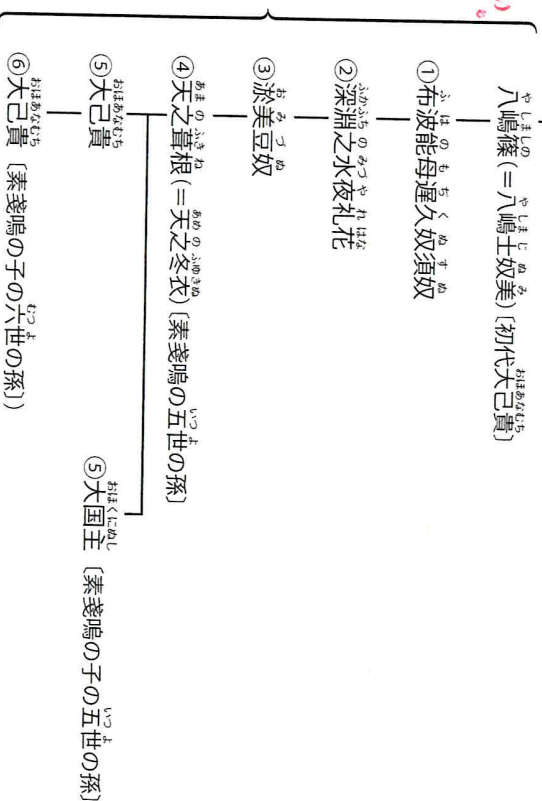
米

ーいたものの下

元(皇)54
 ④ 2519
 ④ 2860¹-73
 ④ 2861¹-1/4 并

「新・日本書紀 第一卷、113頁からコピーして下さい。」

右頁に掲載
 12ホゴ4 → (第5表と同一)
 素戔嗚 — 櫛名田比売(記) [= 奇稻田姫(紀)]
 素戔嗚 — 八嶋篠 (= 八嶋土奴美) (初代大己貴)
 第34表 素戔嗚 — 大己貴 — 大國主の系譜



2,860¹ - 4/5

【素戔嗚の子孫】

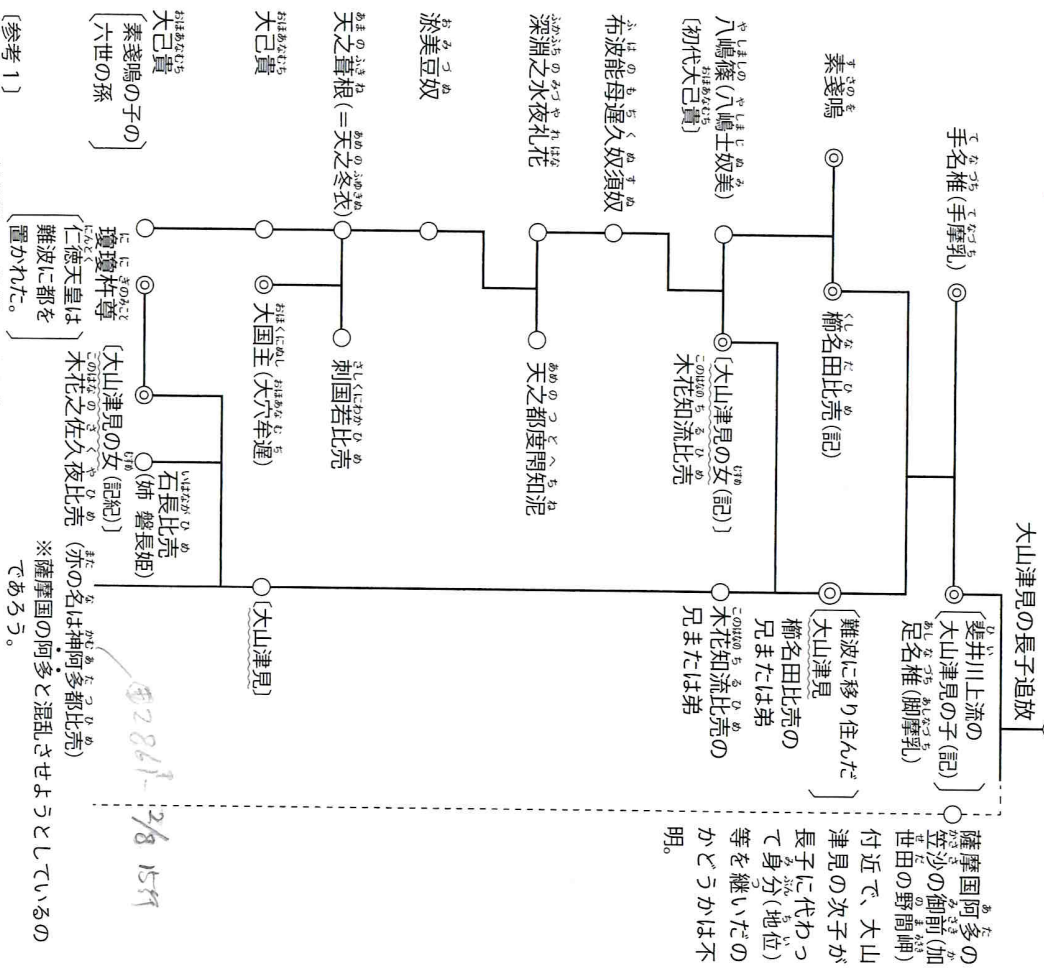
① 素戔嗚が国外追放となった時、——素戔嗚の子供達は、天上の国に留まったりと考えられる。
 ● 神代紀上第七段「書第三に、
 「吾が清き心を以て生せる兒等をば、亦姉に奉る」とある。
 ② 察するところ、
 <素戔嗚の嫡流(数代後の素戔嗚)の子『五十猛命』は、韓地から帰った後、紀伊国に居住したのである>
 と想像される。(神代紀上第八段「書第四、五参照」)
 ● このように、素戔嗚にはすでに長男が居たので、素戔嗚と櫛名田比売(記)との間に生まれた子は、『素戔嗚』という名を襲名するわけにいかず、『大己貴』と自称したものとと思われる。(第1表、第5表、第6表参照)
 *
 ● なお、大己貴命は、別名『八十支神』とも称される。(神代紀上、第八段「書第六参照」)
 ● 大己貴命は、拘奴国人等の目の届かない所で、……密かに、多くの武器を作り、保持していたのかも知れない。

新・ヤマト物語 第一卷 114頁からコピーして下さい。

・左奥全冊に掲載
12ページ→(第6表と同ー)

第6表 大山津見の系譜 (想像)

大山津見(大山祇神)



[参考 2]
○古今集の序文に、「仁徳天皇が即位されず三年経ったので、主には木簀に思い、次の歌を詠んで奉った」とある。(※尚、「木の花」は梅の花をいい、「冬こもり」は春の杳詞である)
○難波津に 咲くや木の花 冬こもり 今は春べと 咲くや木の花
○難波と木花之佐久夜比売との間に、深い関連性があることを示唆しているのである。
○この物語では、「大山津見や木花之佐久夜比売は、難波に居住していた」と考えてみたい。

2.860P 5/5

2153⁹-1/2
2861⁹-1/4
2859⁹-3/3
2861⁹-2/5

2861⁹ 4/8 4/8